

人間精神あるいは「身体の観念」

スピノザの心身合一理論とその実践的帰結

柴 田 健 志

はじめに

精神を「思惟するもの」として、物体（身体）を「延長するもの」として「実在的に区別」するデカルトのいわゆる心身二元論は、精神を物体（身体）とは独立に機能しうる実体とみなすことによって、数学的観念の生得説を確立し、数学的自然学の可能性を基礎づけるための戦略であったといつてよい。だが他方、デカルトの二元論は、精神に固有の機能として「自由意志」を認め、それを中心にして「心身合一」という人間の現実的なあり方を理解しようとする、実践的な帰結をも伴っている。つまりデカルトにとって、心身問題は理論的問題であると同時に、実践的問題でもあった。スピノザは、心身の「実在的区別」を受け入れ、かつそれを理論的に徹底させることで、実践的にはデカルトとは正反対の帰結を導いた。スピノザは、「自由意志」に基礎をおくのではなく、むしろそれを幻想として否定することで、まったく異なった意味で人間の自由を考えようとしたのである。この点をより厳密に言えば、スピノザは、デカルトが知識論的領域とは区別して残しておいた実践的領域を、知識論的領域のなかに完全に吸収し、どこまでも知的な問題として「自由」を理解しようとしたことの帰結として、「自由意志」を否定して「自由」を思考せざるをえなかったのだということになる。

スピノザの議論の徹底性は、神以外には実体を認めず、心身の「実在的区別」は神＝無限実体における「属性」の区別であるとして、思惟と延長を存

在論的には同一物とみなした点に存する。思惟も延長も実体を構成する属性であり、ともに神の本質である「現実存在し、活動する能力」(EI35Dem.)を表現している。そして、人間という個物は神の有限な「様態」であると考えられるがゆえに、人間の心身とは「神の本質を一定の仕方で表現する」(EII10Cor.)、有限な様態という同一物の二側面にほかならない。問題はこの二側面の相互関係であるが、それはたんなる対応関係ではない。「思惟」という属性において自らの「思惟能力」を表現する神、言い換えれば「無限知性」(EI16Pr.Cor.1)は、それ自身の活動から生じるすべてのことを思惟しなければならない。人間の精神とは、「神の無限知性の一部分」(EII11Cor.)であり、その思惟対象は身体である。この意味で人間精神とは「身体の観念」(EII15Dem.)にほかならない。わたしは、心身問題にかんするスピノザの理論の核心は、この「身体の観念」という考えにあると思う。そこでこの考え方が、いかなる論理によって主張されているのか、またそれが、心身合一という人間の現実のあり方にかんしていかなる理解をもたらすのか、さらにそこからいかなる実践的帰結がひき出されうるのか。とりわけ、スピノザがいかなる観点から人間の「自由」をとらえようとしていたのか。これらの点を以下で議論しなければならない。

1 心身平行論と「身体の観念」

人間精神とは「身体の観念」であるというスピノザの主張の意味を的確に理解するには、人間精神は「神の無限知性の一部分である」といういまひとつの主張との関連を問題にすべきである。「無限知性」とは、「無限に多くのもの」(EI16Pr.)を産出しつつ、それらを思惟している神であり、したがって「無限知性」のなかに、ある有限なものの観念のみが単独であることはできない。なぜなら、もし無限知性のなかに有限なものの観念しかないとすれば、無限知性が有限なものしか思惟しえないということになるからである⁽¹⁾。それゆえ、ある有限なものの観念は、他の無限に多くのものの観念とともに

存在するのでなければならない。「神のなかには、神の本質の観念と同様に、神それ自身の本質から必然的に帰結するすべてのものの観念が、必然的に存在する」(EII 3 Pr.)。スピノザによれば、神が「無限に多くの仕方で」(EI16Pr.) 思惟しているということと、神が「無限に多くのもの」(ibid.) を産出するという事は、神の同一の活動の二面である。それゆえ、「観念の秩序および連結は、事物の秩序および連結と同一である」(EII 7 Pr.)。換言すれば、「神の無限の本性から形相的に (formaliter) 帰結するすべてのことは、神の観念から同一の秩序、同一の連結をもって、神のなかに表現的に (objective) 帰結する」(EII 7 Cor.)。こうして、無限の個物が神から産出される時、その全系列は、観念の無限系列として「神の無限知性」によって思惟されているということになる。

いま引用した『エチカ』第二部定理七では、「観念」に対応するものがただたんに「事物 (res)」といわれており、とくに「物体」とはいわれていない、という点にまず注意すべきである。神から産出されたと考えられる個物＝様態が、「延長」の属性のみならず、およそどの属性において考えられる場合にも、それが「神の無限知性」によって思惟されている、というのが定理七の意味するところである。それゆえ、無限の属性において考えられる「事物」は、存在論的には同一物であるが、知識論的なレベルでは事情はもっと複雑である。このレベルではむしろ、「属性が与えられるその分だけ多くの世界が構成される」(Ep.64) のであって、それゆえ同一物の観念は無限に存在すると考えられる。「各々のものは、神の無限知性のなかで、無限の仕方と表現される」(Ep.66)。こういう条件の下で、とくに「延長」の属性のみに注目するとき、そこに「心身平行論」といわれる論理が成立するのである⁽²⁾。つまり、「心身平行論」とは、「延長」の属性によって考えられた個物の無限系列と、無限知性のなかでの「延長」を対象とする観念の無限系列が平行しているという主張である。有限な個物の心身の関係は、この「永遠かつ無限」(EI21Pr.) なレベルでの「心身平行論」を前提した上で理解されなければならない。

人間身体と呼ばれる「事物」の観念を考えてみよう。それは、無限知性においては、「延長」を対象とする観念の無限系列のなかに位置している。つまり、人間精神とは、それが「身体の観念」であるかぎりにおいて、「神の無限知性的一部分」であると考えられるのである⁽³⁾。人間精神とは、それ自身から産出されたものを、「延長」の属性において思惟するかぎりでの「無限知性的一部分」なのである。しかし、人間身体という「事物」が、「永遠かつ無限」な秩序のなかにあるだけでなく、「持続するといわれるかぎりにおいても現実存在する」(EII 8 Dem.) 場合にも、その観念たる人間精神は「神の無限知性的一部分」(EII11Cor.) であると考えられている。ただし、この場合は、「無限であるかぎりにおいて」の神でなく、「現実存在する他の個物の観念に変様したと考えられるかぎりにおいて」の神がその人間精神の原因であると考えられるのである (EII90Pr.)。つまり、永遠の秩序から自らを疎外し、無際限に進む有限な事物の相互作用のなかでそれ自身の身体を思惟する知性、それが「身体の観念」として、あるいは「神の無限知性的一部分」として現実存在する人間精神にほかならぬ。

以上のような議論に従えば、人間精神の思惟対象は身体以外にはなく、したがって人間精神は身体に生じることを思惟せざるをえない (EII13Dem.)。「心身合一」という事態が人間にとって根源的なものである理由はここにある。つまり、それ自身を「延長」の属性において思惟しなければ現実存在しえない存在、それが人間精神なのである⁽⁴⁾。ただし、人間身体はつねに他の物体との相互作用のなかに存在すると考えられるので、人間精神が認識するのは、人間身体そのものではなく、相互作用によって身体に生じた結果でしかない。それ以外の仕方では、自己の身体の現実存在を認識しえないのである。スピノザは身体に生じた結果を「変様 (affectio)」と呼び、その認識の意味についてこう述べている。「人間精神は、人間身体それ自身、およびそれが現実存在するということを、身体が被る変様 (affectio) の観念によってのみ認識する」(EII19Pr.)。

ところで、人間身体の変様は、外部の物体の作用によって生じたものであ

る。したがってそのなかには、ただ部分的にはあれ「外部の物体の本性」が含まれており、人間精神はやはりそれを思惟せざるをえない。「身体の変様の観念」は、「人間身体の本性と同時に、外部の物体の本性を含まねばならない」(EII16Pr.)のである。ここから、自己の身体を中心にした外部の世界のパースペクティヴ、すなわち「表象像 (imago)」が生じるのである(EII17Sc.)。また、「身体の観念」についての観念も神のなかにあると考えられるのだが(EII20Pr.)、この観念は、現実存在する人間精神においては、「身体の変様の観念」についての観念となる。「人間精神は、身体の様々な変様だけでなく、これら変様の観念も知覚する」(EII22Pr.)。これが人間の意識である。というより、人間の意識はこういうものとしてのみ与えられうる。「精神は、身体の様々な変様の観念を知覚する限りにおいてのみ、自己自身を思惟する」(EII23Pr.)。こうして、身体を起点にした外部の世界の「表象像」についての意識として、人間の「自己」が成立する。それは、「表象像」を内容として含む思惟作用そのものを対象にした、いまひとつの思惟作用にほかならない。この思惟作用によって、人間は「心身合一」という事態を、自己自身のものとして自覚するのである。

さてスピノザは、このように「心身合一」を自覚しつつ存在するものとしての人間精神のあり方を、「不十全 (inadequata)」という言葉で規定している。では「不十全」とは何であろうか。人間精神に生じる「身体の変様の観念」は、「身体の変様」をもたらした物体の相互作用の系列に対応していない。逆にいえば、この観念から、「身体の変様」が生じた理由を導くことはできない。われわれはただ、身体を起点にした世界の表象像を、所与として受け取るのみである。それが「不十全」である(EII26Cor.,28Pr.Dem.Sc.)⁽⁵⁾。しかし、この「身体の変様」という事態は、人間身体に作用する諸事物の観念に変様した神の知性によって、それが生じた理由とともに思惟されている。それが「不十全」に対する「十全 (adequata)」である⁽⁶⁾。また同様に、人間精神が所与のことを思惟している理由は、その身体の変様の観念をいくら思惟しても出てこない。つまり、人間精神という観念の観念、すなわち自己自

身にかんする認識もまた「不十全」である (EII29Pr.Cor.)⁽⁷⁾。これに対して、神は人間精神という観念を含む諸観念となって思惟しているがゆえに、それがいかなる理由で一定のことを思惟しているかを把握しうるのである。

このように、「不十全」とは、「心身合一」したものとしての「自己」を意識して現実に存在している人間精神が、まさに現にあるとおりに存在している理由の認識から、根本的に疎外されているという事態を意味している。問題は、この「不十全」という理解の仕方が、いかなる実践的帰結をもたらすかである。デカルトがその自由意志の道徳を提示するにあたって、感情（情念）の考察から始めたように、スピノザもやはり『エチカ』第二部での「精神の本性および起源」にかんする以上のような議論に続けて、第三部では「感情の起源および本性」を証明している。その議論を踏まえた上で、この問題点を考察していかなければならない。

2 感情の論理

『エチカ』第三部定義三でスピノザは感情を次のように定義している。「感情 (affectus) とは、我々の身体の活動能力を増大あるいは減少し、促進あるいは阻害する身体の変様 (affectio), また同時にそれら変様の観念であるとわたしは解する」。我々の身体は外部から複雑な仕方で作用を受けていると考えられるが、その作用によって身体そのものがもつ「活動能力」が増大したり減少したりするだろう。この「活動能力」の現実的な作用を、スピノザは「コナトゥス」と呼んでいる (EIII 7 Pr.)。「コナトゥス」とは「各々のものが自己の存在に固執しようと努める」(ibid.) 作用であるが、この作用はつねに外部の力による影響を被っているわけである。「身体の変様」がその「活動能力」の増大ないし減少を意味するのはこのためである。スピノザは、まずはそのような身体の変様が感情であり、また同時にそのような身体の変様の観念が感情であるという。しかし、スピノザは身体の変様が感情の原因であるといっているのではない。身体の変様とその変様の観念をとも

に感情としているのである。感情という言葉の通常の用法からみれば、こうした定義は奇異である。なぜなら通常の用法では、感情という語はもっぱら精神について用いられるからである。

スピノザの考えでは、延長の属性と思惟の属性は実在的に区別されうるがゆえに、それらのあいだには相互作用は存在しない。それゆえ「身体は精神を思惟するように決定することはできないし、また精神は身体を運動にも静止にも他のこと（もしそれがあるとして）にも決定することはできない」（EIII 2 Pr.）。むしろ、「精神と身体は、ある時には思惟という属性のもとで、またある時は延長という属性のもとで概念される同じもの」であり、それゆえ「われわれの身体の能動と受動の秩序は、本性として我々の精神の能動と受動の秩序と同時」（EIII 2 Sc.）であると考えられるのである。したがって存在論的には、「感情」とは「身体の変様」といってもよいし、その「観念」といってもよい。

ただし、心身の関係は、このように存在論的に理解されると同時に、知識論的にも理解されなければならない。というより、スピノザの議論の重点は、どちらかといえば知識論的な理解の方にあると解釈すべきである⁽⁸⁾。つまり、身体の能動・受動と精神の能動・受動はただたんに「同時」なのではない。精神が形成する観念は、身体の変様を知覚内容として含むからである。「人間精神を構成する観念の対象は、身体すなわち延長の現実存在するある一様態であり、それ以外の何ものでもない」（EIII 13 Pr.）。それゆえ、スピノザのいう「感情」とは、心身において「同時」に生じる変様であるが、それが喜びあるいは悲しみとして感じられるのは精神においてのみである。精神の側でみられた感情とは、精神のコナトゥスたる「思惟能力」（EIII 11 Pr.）の増大ないし減少であり、それが「喜び」ないし「悲しみ」と呼ばれるのである。そしてスピノザは結局この意味で「感情」という言葉を用いていく。「わたしは以下において喜び（Laetitia）を精神がより大きな完全性へ移行する受動と解し、反対に悲しみ（Tristitia）を精神がより小さな完全性へ移行する受動と解するであろう」（EIII 11 Sc.）。

以上が、感情についてのスピノザの考えの基本的な枠組みである。「身体の変様の観念」とは、「われわれの身体の現実存在を肯定する」(EIII10Sc.) 精神のコナトゥスによって形成されるものであり、それゆえ観念そのものが、つねに「喜び」ないし「悲しみ」を生成させるのである。つまり観念とは「画板の上の無言の絵画」(EII49Sc.) のようなものではない。そしてこのことは、精神の「受動」とは、いわゆる受動ではないということの意味する。スピノザの考えでは、われわれが「受動」といわれるのは、「われわれがその部分的な原因でしかないことが、われわれの内に起こる、われわれの本性から生じるとき」(EIID2) である。換言すれば、精神が「不十全な観念をもつ限りにおいて」(EIII1Pr.) である。こうして、『エチカ』第三部の感情論は、第二部の知覚論に重ねられるのである。そこで、自己の身体を起点とした表象の世界のなかでの人間の存在を、感情という面からいまいちど描きなおしてみなければならない。

「喜び」や「悲しみ」を生成させる観念とは、外部の力によって身体に生じた変様の観念である。ただし、その観念は「外部の物体の本性よりもわれわれの身体の状態 (constituo) をより多く表示する」(EIIPr.16Cor.2)。外部の世界を表象するとき、われわれが知覚しているのは自己の身体の変様にほかならず、そのなかに外部の対象の本性が部分的に含まれているというにすぎない。しかし、こういうことをわれわれは意識していない。通常言葉づかいでは、われわれは外部の対象を表象するというのであって、自己の身体の状態を知覚するとはいわないからである。スピノザはこの点を考慮して、「通常言葉を保存するために、その観念が外部の物体をわれわれに現前する (praesentia) ものとして再現する (repraesentant) ところの身体の変様は、事物の形象に対応しないけれども、われわれはそれを事物の表象像 (imago) と呼ぶであろう」(EIII17Sc.) と断っている。この点は重要である。なぜなら「通常言葉」はわれわれの通常意識のあり方に対応しており、そこでは「喜び」と「悲しみ」はその原因である外部の対象へ関係づけられ、それ

らに対する「愛」または「憎しみ」としてあらわれることになるからである。「愛とは、外部の原因の観念をともなった喜び以外の何ものでもなく、また憎しみとは、外部の原因の観念をともなった悲しみ以外の何ものでもない」(EIII13Sc.)。「身体の変様の観念」からは、こうして外部の対象への「愛」または「憎しみ」、およびこれらの様々な種類（「好感」「反撥」,「希望」「恐怖」など）が生成するであろう。つまり、「身体の変様の観念」は、世界の表象としてわれわれの意識に現れるがゆえに、「喜び」と「悲しみ」は、ほとんどの場合に、外部の対象への「愛」や「憎しみ」を伴って、あるいはただ「愛」や「憎しみ」として意識されるのである。

ところで、「身体の変様の観念」についての観念もまた、人間精神のなかにあるのであった。言い換えれば、人間精神はこれらの感情を意識するのである。スピノザはここから善悪の認識が生成するという。「善悪の認識は、われわれに意識された限りにおける、喜びあるいは悲しみの感情にほかならない」(EIV 8 Pr.)。善悪とは、個々人が自己の現実存在に固執する力が、外部の力によって規定される限りで人間精神に生じる感情が、意識されたものにすぎないである。それ以外に、善悪の概念の起源を認めないところに、スピノザの徹底性がある。スピノザの考えでは、「善悪」とはそもそも「喜び」「悲しみ」の感情であり、両者のあいだには見方の違いしかない。つまり両者は、「ただ考え方において (solo conceptu) 区別される」(EIV 8 Dem.)というにすぎない。もちろん、これらのうちで根本的なのは感情の方である。つまりまず「喜び」あるいは「悲しみ」が生じなければ、それらの観念である「善悪」は生じない。この意味で、善悪は「喜び」と「悲しみ」という感情に還元されうるのである。

さらに、「善悪」の起源である「身体の変様の観念の観念」からは、同時に「自己」の認識が生成するのであった。つまり、「善悪」の生成と「自己」の生成は同時である。しかしそれゆえに、はたして「自己」というものがまずあって、その自己なるものが「善悪」を判断しているのか、それとも「善」とみなされるものを求め、「悪」とみなされるものを避けようとするものが

「自己」であるのか、じつはどちらともいえないことになる。

以上の議論の焦点は、人間の「コナトゥス」が、外部の力によって規定され、表象の世界のなかで行使されるということから、外部の対象への様々な感情や「善悪」および「自己」の概念の生成を示すことにある。そこで最後に、この「コナトゥス」を中心にして以上の内容をまとめておくべきであろう。「不十全」な観念から生じる「喜び」と「悲しみ」の感情は、表象の世界のなかで「愛」と「憎しみ」として意識に現れることで、すでに「コナトゥス」の方向を規定している。つまり、「愛」とは愛される対象へ向かうことであり、「憎しみ」とは憎まれる対象を回避しあるいは破壊しようとするものである。スピノザはこういう「コナトゥス」の作用を「衝動 (Appetitus)」(EIII 9 Sc.) と呼ぶ。それは心身に同時に関係するものであるが、この「衝動」が精神の側でのみみられたものが「意志 (Voluntas)」(ibid.) なのである。ところで、この観念の観念として、「善悪」の概念と「自己」とが成立するが、それはまた「衝動」の観念でもある。スピノザはこの意識された「衝動」を「欲望 (Cupiditas)」(ibid.) と呼ぶのである。「善悪」「自己」「欲望」、この三者は同時に成立する。こうして人間は、外部の対象を善あるいは悪と判断し、そういう対象への欲望を自己自身の内に感じて行為に決定されるのである。では、知覚と感情を「観念」の二側面として重ね合わせるこの論理が、いかなる実践的帰結をもたらすのか。この点を考えてみなければならない。

*

わたしが以下で指摘したい実践的帰結は三つある。(1)「自由意志」を否定する論理が、「自由意志」の肯定と結びついた自然の秩序の転倒を攻撃する論理でもあること。(2)自分が「自由」であると信じる人間相互の関係から、人間同士の対立が不可避免的に生じること。(3)この対立を友好へと転換することが、転倒された自然の秩序から実在的な秩序への回帰でもあり、そのなかに人間が「自由」になるための方向が見出されているということ。

この三点を論じることで、わたしは、スピノザの徹底的に知識論的な哲学が、まさに知識論的であることによって徹底的に実践的なものとなっている点を示唆してみたいのである。

3 実践的帰結(1) 自然の転倒

以上のような感情の論理の意義は、「愛」と「憎しみ」およびこれらの様々な種類や「善悪」が、すべて「喜び」と「悲しみ」に還元されるという点にあるのではない。むしろ、還元されるにもかかわらず、そのようなものとしてはわれわれの意識に現れえないという点が重要なのである。例えば、「愛」と「憎しみ」はそれぞれ「外部の原因の観念」を伴う「喜び」ないし「悲しみ」であると定義されていた。しかし、われわれが実際にそうと意識しているという意味においてはではない。実際には、「外部の原因」は原因としてでなく、むしろわれわれの欲望の目的として意識されているのである。「身体の観念」たる人間精神は、その身体に生じることの理由ないし原因の認識から排除されているからである。またスピノザによれば、「善悪」とは「喜び」と「悲しみ」が意識されたものにすぎず、何ら客観的なものではない。しかし人間は、やはりそうとは意識しない。いかなる「喜び」ないし「悲しみ」も、われわれの意識においては、外部の対象への「愛」と「憎しみ」となりうるが、ここで「善悪」は、それらの対象がもっている客観的な性質としてわれわれの意識に現れるからである。さらに、「善悪」の認識と同時に生成するのが「自己」の認識であった。人間精神は、ここで外部の対象へ向かっているそれ自身の思惟作用を意識するが、その作用そのものの原因は知覚しえない。しかも「善悪」は、客観的な性質として対象に付着しているように知覚される。それゆえ、「身体の観念」に「喜び」あるいは「悲しみ」の感情が生じているというこの事態は、「身体の観念」たる当の人間精神にとっては、外部の対象を「自己」の判断に従って自由に追求していることとしてしか知覚されえない。スピノザは、人間の意識というものが、こういう転倒

の上に成り立っていることを、次のような言葉で指摘している。「われわれは、あるものが善であると判断するがゆえにそのものへ努力し、意志し、衝動を感じ、欲望するのではなく、反対に、あるものに努力し、意志し、衝動を感じ、欲望するがゆえに、そのものが善であると判断する」(EIII 9 Sc.)。この引用の前半はわれわれの意識の事実。後半がわれわれが意識しえない真実である。

こうしたことは、『エチカ』第一部付録においてスピノザが多くの言葉を費やして固執した論点であるが、その中心にあると思われる議論は、以上われわれが考察した『エチカ』第二部、第三部の論理を先取りする形で述べられている。そこで逆に、以上の考察の論点を、このテキストの言葉で要約することができる。「人間はすべて、自己に有用なものを求める衝動をもち、それを意識している」(EIApx.)のだが、「その原因は知らない」(ibid.)。自らを一定の思惟あるいは欲望へ決定する真の原因を知らないがゆえに、人間は「自分を自由であるとみなす」(ibid.)し、またその衝動にもとづき、「すべてのことを、目的のために、つまりは自分が欲求する有用なもののために行う」(ibid.)のである。しかしスピノザによれば、実際は、人間が求める対象は、衝動をもたらした原因であり、目的などではないのである。こうして人間は、原因（外部の力）と結果（意識）を取り違え、「自然を全面的に転倒」(ibid.)させてしまうだろう。こうした転倒によって「善、悪、秩序、混乱、暖、寒、美、醜」(ibid.)などが、「諸事物の本性」(ibid.)を説明する概念として形成されていく。

自然の転倒。これが、人間精神は「身体の観念」であるという理解、またその理解をもとに主張される知覚と感情の本性にかんする論理から出てくる、第一の実践的帰結である。

4 実践的帰結(2)「人間は互いに敵である」

続いて、第二の帰結を考えていかなければならない。人間の相互関係とい

う実践的領域を、スピノザはやはり徹底して知的に考えている。問題は、表象の世界のなかに現れる他の人間の存在は、コナトゥスの作用にいかなる影響を及ぼすのかという点である。スピノザは『エチカ』第三部でそれを様々な局面から考察しているが、ここで問題にすべきは、定理二七で問題にされる、不特定の他者に対する感情である。「われわれに似た者〔同類の者〕で、またそれに対してわれわれが何の感情もいだいていない者」(EIII27Pr.)というのが、そのような他者に対するスピノザの定義である。ただたんに自分と同類の者(=人間)だというだけの存在に対して、われわれがいかなる感情をもつか、そこで問題になっている。

スピノザによれば、同類のものの喜びないし悲しみは、やはりわれわれにも喜びないし悲しみをもたらす。「われわれに似た者〔同類の者〕で、またそれに対してわれわれが何の感情もいだいていない者が、ある感情に刺激されるのをわれわれが表象すれば、そのこと自体によって(eo ipso)、われわれは類似の感情に刺激される」(EIII27Pr.)。つまり、他人が喜びを感じていると表象すれば、自分も自然と喜びを感じ、逆に他人が悲しむのを表象すれば、自分も自然と悲しみを感じる。後者が、不幸な者への「哀れみ(Com-miseratio)」(EIII27Sc.)の感情にほかならない。これらの感情はまったく自発的なもので、どうしてそうなるかをわれわれは意識できない。スピノザが「そのこと自体によって(eo ipso)」と断っているのはこの点を明示するためである。

では同類の者の感情を表象することは、なぜわれわれにそれと類似の感情をもたらすのであろうか。スピノザは、こうした事象を「感情の模倣」(EIII27Sc.)と名付けているのだが、その証明はこうなっている。

もし外部の物体の本性がわれわれの身体の本性に類似していれば、われわれが表象する外部の物体の観念は、外部の物体の変様に類似したわれわれの身体の変様を含むであろう。したがって、もしわれわれに類似したある者が、ある感情に刺激されたことをわれわれが表象すれば、この表象は、この

感情に類似したわれわれの身体の変様を表現するであろう (EIII27Dem.)。

すでにみたように、身体の変様の観念は、身体の本性と同時に外部の物体の本性を含む (EII16Pr.)。つまり身体の変様の観念は、身体と外部の物体の本性の混じり合ったものである。この観念によって、人間精神は外部の対象を表象すると考えられるのである (EII17Sc.)。ところが、自己自身の身体と外部の身体の本性が類似している場合は、われわれは自己の身体の変様に含まれる他者の身体の変様 (=感情) と、自己自身の変様 (=感情) を分離して知覚することができない。その結果、「同類の者」が喜ぶのを表象するとき、その喜びは他者の喜びであると同時に自己自身の喜びとなってしまうのである⁽⁹⁾。ただし、身体の変様の観念は外部の対象の本性ないし変様を含むとはいえ、ただ部分的にであり、外部の対象よりも「われわれの身体の状態をより多く表示する」 (EII16Cor.2) ものである。だから、われわれが表象する当の本人の喜びと、そのときわれわれを感じる喜びはまったく同じというわけではない。また当の本人がもはや喜びを感じなくても、われわれのこの身体の状態が持続する限り、われわれは依然としてその人間が喜びを感じていると表象し、同時に自分自身も喜びを感じるということもありうるのである。

ところでスピノザは、この「感情の模倣」という心的事象は、不特定の多数者の感情についても生じるという。スピノザが『エチカ』第三部定理二九で「人々 (homines)」と呼ぶのはこういう多数者のことである。われわれが「人々」の感情を模倣するということは、「人々」が愛すると思われるものを愛し、「人々」が憎むと思われるものを憎むということにほかならない。「人々」の身体の変様 (=感情) と自己の身体の変様 (=感情) が、この両者の類似性ゆえに、混じりあって知覚されてしまい、いったい誰の感情であるかが曖昧なまま、喜びや悲しみを感じざるをえないのである。ある対象を愛するということは、われわれの身体の活動能力を促進するような対象の本性を含む、自己の身体の変様を肯定することであるが、われわれのコナトゥスはできる限り「自己の存在に固執しようと努める」がゆえに、活動能力を

促進させてくれるこの変様の状態を維持しようとする。つまりはその対象をできる限り表象しようとする。こうしてわれわれは、「人々」の愛するものを実現させ、現前させようとし、また逆に「人々」が嫌悪することが実現されることを嫌悪するであろう (EIII29Pr.)。「人々」の意向に従い、「人々」から承認されんとする欲望がここから生じる。スピノザが「名誉欲 (Ambitio)」 (EIII29Sc.) と呼ぶ欲望である。

スピノザの考えでは、この欲望が、人間のあいだに根本的な対立を導き入れるのである。自分が愛するものを、もし不特定の多数者のなかの誰かも愛していると表象すれば、そのこと自体によってこの愛 (喜び) は促進される。その人間の愛 (喜び) が模倣され、もともとの喜びにつけ加わるからである。ところが自分が愛するものを、他の誰かは嫌っていると表象したら、そのこと自体が「精神の動揺」 (EIII31Pr.) をもたらすであろう。なぜならわれわれは「同一のものを同時に愛しかつ嫌う」 (EIII31Dem.) ことになるからである。こうして、「各人はできるだけ自分の愛するものを誰しも愛するように、また自分の憎むものを誰しも憎むように努める」 (EIII31Sc.) ようになるだろう。スピノザは、自己の意向を他人に押しつけようとするこの欲望が「じつのところ名誉欲である」 (ibid.) という。なぜなら、われわれが自己の意向を他人に押しつけるのは、皮肉なことに、その他人から承認を受けるためなのだから。ところが、各人が愛するもの、嫌悪するものは、基本的に相互に異なりうる。スピノザのみるところでは、これが人間のあいだに対立を生み出し続ける源泉なのである。

これで、誰しも他の人々が自分の意向にしたがって生活することを自然に求めるということをわれわれは理解する。そしてすべての人が等しくそれを求めるがゆえに相互に障害になり、またすべての人がすべての人から賞賛されあるいは愛されることを望むがゆえに互いに憎みあっている (ibid.)。

『政治論』では、とりわけこういう側面が強調されている。ほとんどの場合、

人間を支配するのは「怒り、ねたみ、もしくは他の憎しみの感情」であり、それゆえに「人間は本性からして互いに敵である」(TPII14)。もっとも、こういう事態はべつに「人間本性の欠陥」(EIIPrf.,TPI 4)のせいではない。外部のものと自己の身体の本性が混じりあった「不十全」⁽¹⁰⁾な観念にもとづいてコナトゥスを行使せざるをえないという、有限様態の存在そのものから帰結することにすぎないのである。

5 実践的帰結(3)「人間にとって人間ほど有益なものはない」

最後に、「身体の観念」という考え方の第三の帰結について考えてみなければならない。スピノザの考えでは、人間身体とは延長の属性の下でみられた様態であり、他の多くの身体との相互作用のなかで現実存在に決定されている。人間精神が知覚するのは、こうした相互作用のなかで次々にもたらされる変様である(EIIPst.3)。ところで、様態とはひとつの個体であって、各々の様態がそれに特徴的な個性をもっていると考えられる。コナトゥスとは「自己の存在に固執しようと努める」作用であるが、それはこの個性を維持することである。では個性とは何であろうか。スピノザは、人間身体「形相」(EIV39Dem.)つまりその個性は、その諸部分が相互に保っている「運動と静止の割合」(ibid.)にあると考えた。この割合が保存される限り、身体はその個性を維持できる。したがってコナトゥスとはこの割合を維持しようとする作用にほかならない。スピノザはさらに無限の個体を含む全宇宙が「一つの個体である」(EII Lem.7)という⁽¹¹⁾。個々の有限な身体は、全宇宙の個性を維持するような仕方で生成消滅していると考えられるのである。したがって、全宇宙すなわち自然それ自体を構成する「運動と静止の割合」に調和するような仕方で、多数の個体が相互に結びつくなら、その各々の個体は自然のなかで自己の個性を保ち、その存在をよりよく維持しうるはずである。多数の個体がそれに従って自己の存在を維持しうるような「運動と静止の割合」は、多数の個体にとって「共通のもの」

(EII37,38Pr.) といってよい。したがって、「自己の存在に固執しようと努める」ことは、「共通のもの」を追求することでなければならない。

ところが人間のコナトゥスは、「不十全」な観念にもとづき、表象の世界のなかで行使されており、そのなかで人間の意識は「自然を全面的に転倒」させてしまっている。また、共通のものを追求するどころか、人間は「互いに憎みあっている」。そのことで「自己の存在に固執しようと努める」ことを、自分自身で困難にしているのである。理性が我々に命じるのは「各人がその存在をできる限り維持するように努めること」(EIV18Sc.) であるとすれば、人間はもともと「理性の命令に従わない」(ibid.) といわねばならない。しかし、スピノザによれば、人間が理性的に存在することはやはり可能である。つまり、共通のものを認識し、それを追求することは可能である。

多数の個体に共通のものは、以下の二点から規定されている。

- (1) 「いかなる個物の本質をも構成しない」(EII37Pr.)。
- (2) 「十全にしか概念されえない」(EII38Pr.)。

身体の変様の観念には、その身体の本性と外部の物体の本性が含まれるが、共通のものはそのどちらにも属さない。むしろ多数の身体の相互作用そのものを可能にしているものである。身体の変様の観念、およびその観念は、個々の様態の個性あるいは「本性」にかんしては、「不十全」な認識しかもたらさない。これに対して、共通のものとは、個々の様態の「本性」に属するものではない。それは、様態の現実存在を一定の仕方で規定する法則として考えられなければならない(TPII 5)。その限りで「十全」に認識されうるのである。

スピノザは、この共通のものの認識を「共通概念」(EII40Sc. 1) あるいは「理性」(EII40Sc. 2) と呼ぶ。これに対して、「不十全」な認識は「意見」あるいは「表象」と呼ばれる (ibid.)。スピノザはこの二種類の認識に本質の「直観」をつけ加え、三種類の認識を設定するのである (ibid.)。(表象＝第一種の認識、理性＝第二種の認識、直観＝第三種の認識)。スピノザは、この三種類の区別を比例数の認識の仕方を例にして説明している。1 : 2 = 3 :

xのxを求めるとき、たんに経験によって、あるいは「何の証明もなしに」(ibid.) 聞き覚えたやり方に従うとすれば、それは第一種の認識である。これに対して、「比例数の共通の特質」(ibid.) によって $x=6$ を導くとすれば、それは第二種の認識である。さらに第三種の認識とは、この解を推論によってでなく「直観」(ibid.) によってとらえることである。(第三種の認識は以下では問題にしない)。相互に作用を及ぼしあう無数の様態の観念に変様した神の知性においては、つねに多数の様態に共通する「運動と静止の割合」つまり比例関係についての認識がある。ところが、人間精神には、この割合から生じた結果のみが与えられている。のみならず、人間は自然の秩序を転倒して、自己自身を自由とみなすがゆえに、この認識を拒絶してさえいるわけである。

それゆえ、人間精神が理性的に認識するには、ある条件が必要である。各々の個体が自己の個性をもっともよく維持しうるのは、多数の個体に共通する「運動と静止の割合」に従って自己自身を導くときである。したがって逆に、そのような共通のものを認識する条件は、自己の個性が現実によりよく維持されていることの自覚である。これは何ら循環ではない。共通性は個性の「存在理由 (ratio essendi)」であり、個性は共通性の「認識理由 (ratio cognoscendi)」であると解釈すべきなのである。「理性」の命令が「各人がその存在をできる限り維持するように努めること」であるとされ、それと同時に、共通のものを認識する能力が「理性」であると主張されるのは、こういう意味においてである。

人間身体がその個性をよりよく維持するということは、身体を構成する諸部分が活発に作用して、全体としての「運動と静止の割合」を実現することへ向かうということである。ところで、人間身体は極めて複雑な構造をもつ個体である。それは「本性の異なる極めて多くの個体—その各々がまた極めて複雑な組織の—から構成されている」(EIIPst. 1) のであって、その構造は「人間の技能によって作り出されたすべてのものを技術的にはるかに越えている」(EIII 2 Sc.) と考えられるほどである。それゆえ、「人間身体を組

織する個体，したがってまた人間身体自身は，外部の物体から極めて多くの仕方で刺激される」(EIIPst. 2)。また逆に「人間身体は外部の物体を極めて多くの仕方で動かし，かつこれに極めて多くの仕方で影響することができる」(EIIPst. 6)。それゆえ「人間身体を多くの仕方で刺激されうるような状態にさせるもの，あるいは人間身体が外部の物体を多くの仕方で刺激するのに適するようにするものは，人間にとって有益である」(EIV38Pr.)。スピノザの考えによれば，そのような状態をもたらしてくれるものはほかでもない，人間の交友である。理性的にものを認識することの条件は，人間の交友にある。「人間にとっては，友好を結び，自分たちすべてをひとつにすることにより適するような紐帯によってたがいに結束すること，そして一般的に言えば友情を強固にするのに役立つようなことをなすことが，何より有益である」(EIVApX.XII)。ひとことでいえば，「人間にとって人間ほど有益なものは何もない」(EIV18Sc.) のである。スピノザはこういう共同性の向こう側に「自由」をみようとした。デカルトが「自由」な個人を前提して人間の交わりを説いたのとちょうど対称的に。

スピノザの「自由」がいかに困難なものであるかを，以上の議論からわれわれは見て取ることができるはずである。だが，この困難さは，スピノザが実践の領域を知的な領域に吸収してしまったことの当然の帰結であるといわねばならない。重要なことは，その知識論的な哲学が，上のような極めて実践的な態度を要求しているという点なのである。この逆説がスピノザの哲学の根底にあるとあってよい。そしてその逆説に現実性を与えているのが，「身体の観念」という人間精神のとらえ方なのである。

文献

Gebhardt (ed), *Spinoza Opera*, Heidelberg, 1925 = G
Ethica = E, G.II

Definitio=D. Propositio=Pr. Demonstratio=Dem. Corollarium=Cor.

Scholium=Sc. Explicatio=Ex. Appendix=Apx. Postulata=Pst. Lemma=Lem.

Praefatio = Prf.

Tractatus Politicus = TP, G.III

Epistulae=Ep, G.IV

注

- (1) 『エチカ』第一部定理二—証明を参照。この複雑な証明は、神の思惟のなかに有限なものの観念があるという仮定が、論理的に神の思惟以外の思惟を要求するが、それが仮定に反するという、スピノザの得意とする「帰謬法」による証明である。また「無限知性」の存在論的な位置づけにかんしては、書簡六四で、「神から直接に産出されるもの」は何かというチルンハウスの質問に対して、スピノザが「絶対的に無限な知性」と答えていることから、「無限知性」とは実体を構成するものとしての「思惟」の属性そのものではなく、この属性のなかで産出された無限の様態であると解釈するのが妥当である。実際、『エチカ』第一部定理三一においても、「無限知性」は「能産的自然」(=実体)でなく、「所産的自然」(=様態)であるとされている。
- (2) 『エチカ』第二部定理四から七では、各々の属性において考えられる事物は、存在論的には同一であるという、存在論上の平行論に対して、どの属性において産出された事物に対しても、神のなかにならずその観念があるという、知識論上の平行論が優位にたっていることが認められる。「身体の観念」との関連でこの点を強調する解釈として、桂寿一『スピノザの哲学』東京大学出版会、一九五六年、二一二-二一五頁。
- (3) オルデンプルグに宛てた書簡 (Ep.32) で、スピノザは、人間精神は「ただ人間身体を知覚する限りにおいて」つまり身体の観念である限りにおいて、「無限な思惟能力」と同じ力であるとし、「この点で (hac ratione)」それは「無限知性的一部分である」と明言している。
- (4) スピノザの心身合一理論が、その知識論的な平行論の帰結であるという点を明確に定式化したのはゲルーである。「それゆえ、観念と対象が決して分離しえないという点が、知識の本性に結びついており、それが観念の本質の根本であると同時に、魂の本質の根本であり、心身合一の、そして人間の本質の根本でもある」。Martial Gueroult, *Spinoza II-L'âme*, Aubier, 1974, p.136
- (5) これらの定理では、「十全な観念をもたない」、あるいはそれらの観念は「混乱している (confusae)」という表現がみられる。
- (6) 『エチカ』第二部定理三二では「十全」でなく「真 (vera)」という用語になっ

- ている。
- (7) この定理では、「切断された (*mutilatam*) 観念」という表現がみられる。
 - (8) Gueroult, *op.cit.*, p.140
 - (9) この証明の解釈は次の研究に負っている。
Pierre Macherey, *Introduction à l'Ethique de Spinoza III*, PUF, 1995, pp.216-217
 - (10) 「不十全」な観念はしばしば「混乱した (*confusa*)」観念とも言い換えられるが、この *confusa* という形容詞の本来の意味は、複数のものが混ざり合ったというほどの意味である。スピノザはこの意味で「不十全」を *confusa* と言い換えていると解釈しうる。Cf. Gueroult, *op. cit.*, p.138
 - (11) 書簡六四では、「無限の仕方で変化しながらも、やはりつねに同一にとどまる全宇宙の相貌 (*facies totius universi*)」があるといわれている。この意味で、自然全体は「一つの個体」と考えられるのである。